



Title	能楽と俳諧：宝生沾圃を中心として
Author(s)	三ッ石, 友昭
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49119
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	三ツ石 友 昭
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 2 3 0 8 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	能楽と俳諧—宝生沾圃を中心として—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 天野 文雄 (副査) 教 授 永田 靖 教 授 飯倉 洋一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、江戸時代後期に宝生座の能役者として、また蕉門の俳人として活動した宝生佐大夫（沾圃、延享2年〔1745〕没、享年 83）をめぐって、その事蹟、交友関係、作品などをおして、謡（能の詞章を謡う能の部分演奏の一つ）の一大流行期である江戸時代における能楽と俳諧の緊密な関係を論じようとしたもので、全体は第1篇「宝生沾圃の生涯」、第2篇「宝生沾圃周縁の人々」、第3篇「宝生沾圃の作品」の3部で構成されている。分量は400字換算で約500枚におよぶ論文である。

第1篇「宝生沾圃の生涯」は、第1章「沾圃という人」、第2章「沾圃閱歴考」、第3章『『内藤家文書』『古由緒書』に見る沾圃』、第4章「磐城の沾圃」の4つの章で構成されている。ここでは、まず、従来誤りを含んだまま流布していた沾圃の事蹟を基本的なレベルで整理し、さらに沾圃の能役者としての事蹟と俳人としての事蹟を、「芭蕉入門以前」「蕉門時代」「芭蕉没後時代」「磐城滞在時代」「磐城以後の時代」の区分のもと、能楽資料、俳諧資料、沾圃のパトロンだった内藤家の資料などによって丹念にたどり、従来の伝記研究の不備を正し、また、これまでその全体が十分に把握されていなかった沾圃の事蹟が、あるていどまとまったかたちで提示されている。ここではたとえば、江戸における沾圃の住所、沾圃が芭蕉の門人となった経緯について、磐城の内藤露沾のもとにいた時代の身分について、沾圃が磐城の露沾の御前で《山本小町》という奇曲を演じたことなど、能楽研究、俳諧研究両分野にかかわることが多く問題にされている。

第2篇「宝生沾圃周縁の人々」は、沾圃と交流のあった里圃、芭蕉、露月、内藤露沾などの俳人をめぐって、やはり能楽とのかかわりという視点から考察を加えたもので、第1章「里圃という人」、第2章「里圃再考」、第3章「能楽と芭蕉—小野小町を中心として—」、第4章「芭蕉発句考—溜池と琵琶湖—」、第5章「露月と沾圃」、第6章「露沾と内藤家」の6章からなっている。ここでは、元禄8年（1695）の沾圃の序がある『俳諧翁草』の編者である里圃は沾圃の能の弟子だった山田市之丞かとし（第1章、第2章）、芭蕉と能とのかかわりを、芭蕉の観能体験や彼が嗜んだ謡曲の流儀をめぐって論じ（第3章）、さらに芭蕉と露沾の交流を伝える芭蕉の発句「さみだれに鴉のうき巢を見にゆかむ」をめぐって、この句が琵琶湖を詠んだものではなく、巨大な溜池に隣接していた内藤家の江戸上屋敷を念頭においた句であろうことを詳細に論証し（第4章）、また、沾圃の門人で多くの絵俳書を刊行し、かつ謡の師匠でもあった露月の事蹟を紹介し（第5章）、内藤家の歴史を詳細にたどって、そのなかに露沾の文事を位置づけている（第6章）。このうち、第6章の「露沾と内藤家」は、日本史研究の成果もふまえた目配りのきいた論述で、分量も50頁（400字換算100枚あまり）ほどの力篇である。

第3篇「宝生沾圃の作品」は、沾圃が編纂にかかわった『続猿蓑』を蕉風俳諧の展開のうちに位置づけようとした論と、沾圃の著作になる謡曲『祐養園』と『面論記』の紹介であり、全体は第1章「「かるみ」試論」、第2章「『続猿蓑』「八九間歌仙」考」、第3章「〔祐養園〕の成立」、第4章「『面論記』注釈」からなる。

なお、以上のほか、本論文には、序章と跋文が付されており、序章においては近世における謡曲と俳諧のありようやその関係が諸資料をもとに概観的に紹介されている。

論文審査の結果の要旨

本論文が対象としている江戸時代における能楽と俳諧の関係については、これまでも、能楽研究の側からも俳諧研究の側からもそれなりに注意はされていたが、それに関する研究はなお部分的な指摘や考察にとどまっていた、この問題にひとつの見通しを与えるような体系性をそなえた研究は、どちらの分野からも出ていなかった。本論文は第8世宝生大夫重友の三男にして俳諧師でもあった宝生佐大夫（沾圃）の事蹟を通じて、江戸時代における能楽と俳諧の関係という課題に取り組んだもので、その考究はあくまでも沾圃とその周辺を出るものではないが、一貫して沾圃という人物をとおしてこの問題を考え、該分野に新たな視点をもたらした点に小さからぬ意義が認められる。あるいは、本論文は、「宝生沾圃とその周辺」という視点からまとめたならば、よりまとまりのよい論になったのではないだろうか。また、本論文のような研究には、当然、能楽・俳諧両分野の研究状況を的確にふまえることが求められるが、この点、俳諧研究から出発した申請者は能楽研究の現況をよく把握して論を進めており、本論文については、この点も評価されるところである。

以上は本論文の概括的な意義であるが、その具体的な意義としては、以下の3点が指摘できよう。第1に、能役者にして俳人でもあった宝生佐大夫沾圃という人物についての関歴をその作品や著作も含めてかなり明らかにしたこと。また、それによって、江戸時代には、能役者が俳人でもあるということが、そう特殊な現象ではなかったこと、換言すれば、江戸時代には、能と俳諧はともに広い社会的な基盤をもつ教養として存在したことが明らかになったこと。第2に、俳聖芭蕉と能謡とのかかわりが、事例は少ないながら明らかにされたこと。その多くは俳諧研究においては既知の事例であるが、それらが能楽研究的な視点で見直されている点に意味があろう。芭蕉がある所で《太刀》という稀曲を見たことを伝える『三冊子』の記事などはその好例であり、これらは今後の芭蕉研究にもいささか影響を与えるものと思われる。第3に、沾圃周辺の能謡とかかわる人物について考証を加え、そこでも能と俳諧が当時の基盤的な教養であったことを提示したこと。その点での大きな成果が第2篇第6章の「露沾と内藤家」である。

本論文は近世日本文化の基盤であった能謡と俳諧を対象として以上のような成果をあげているのだが、本論文は申請者の20年ほどのあいだにおける研究をまとめたためであろう、なかには能楽と俳諧の関係という本論文の基本的な視点が希薄な論がいくつかあり、そのため、論文としての体系性を欠いている面がある。たとえば、第3篇の「「かるみ」試論」と「『続猿蓑』「八九間歌仙」考」などがそれで、これらはそれぞれ論としては十分な説得力をもっているものの、そこで論及されてよいはずの沾圃との関係にほとんど言及がない。もっとも、そうした論も本論文のなかに置かれてみると、近世における能楽と俳諧という本論文のテーマを支える論として機能してはいる。また、本論文は総体的に、事実の考証にみるべきものがある一方、俳諧作品と能楽との関係という作品分析が手薄であるが、この方面の研究は申請者の今後の課題であろう。以上を総合して、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいと認定される。